

鍼治療は脳の活動を活発にする

Acupuncture activates the brain

doi:10.1038/news050425-12/1 May 2005

Andreas von Bubnoff

鍼治療には偽薬効果ではない現実の効果があることが、脳画像診断法で確認された。

鍼治療にはまだ解明されていない点が多いものの、実際測定可能な影響を脳に与えることが発見された。鍼治療が患者の役に立っている理由が、効用に対する患者の単なる期待感によるものだけではないという新たな証拠がもたらされたのだ。

サウサンプトン大学（英国）の補完医学の専門家 George Lewith をリーダーとする今回の研究では、本物の鍼を使った治療では、鍼のように見える偽物を使った場合よりも多くの脳内領域の活動が活発になることが、脳画像診断法によって明らかになった。「これは、鍼治療に偽薬（プラシーボ）効果ではない現実の効果があることを、脳画像診断法によって初めて示した研究となった」と Lewith は語る。

鍼治療は、病気、痛みや依存症に対する古代中国の治療法で、体の決まった場所（ツボ）に細い鍼を刺して行われる。鍼治療のメカニズムはほとんど解明されておらず、これまでに実施された鍼治療の臨床試験の結果もまちまちであった。「臨床試験によって効果が認められたり認められなかったり、とても複雑になっている」と語るのは、鍼治療を研究するハーバード大学（米国マサチューセッツ州ボストン）の Ted Kaptchuk だ。これまで行われた数多くの研究では、確認された効用のほとんどが偽薬効果によるものであるといわれている。

「このような混乱の一因は、鍼治療の臨床試験における比較対照試験の計画が不適切だったことかもしれない」と

複数の専門家は指摘する。たとえば、一部の臨床試験では被験者にツボでないところに鍼を刺していた。しかし、これではツボの問題は反映されず、単に鍼を刺すことが効果的な治療法であるかどうかを実証する試験になってしまうだろう。

押すと引っ込む模造鍼

偽薬効果をみるためのより適切な方法を使おうと考えた Lewith のチームは、実際には皮膚に突き刺さらない伸縮自在の鍼を使って、被験者には鍼が刺さっていると思わせる方法を用いた。「この鍼は、舞台上で使われる小道具の短剣のように、鍼の先を押すと鍼が柄の中に引っ込むようになっている」と Lewith は説明する。これにより、被験者は自分が鍼治療を受けていると思込んだのだ。もちろん、実際はそうではない。

被験者グループは親指に関節痛のある 14 人の患者で、上記の偽薬治療と本物の鍼治療に加えて、先がとがっておらず皮膚に突き刺さらない鍼を使った鍼治療類似行為の 3 種類を受けた。最後のケースでは、この行為に何の効果もないことが被験者にあらかじめ告げられた。

次に Lewith たちは、陽電子放射断層撮影法を使って、脳の活動を測定した。すると、偽薬治療を受けた場合も本物の鍼治療を受けた場合も、オピエートに反応することが知られる脳内領域の活動が活発になった。ここで、オピエートとは脳内で分泌される物質で、鎮痛作用がある。

「鳥」の活動が活発になる

本物の鍼治療を行うと、大脳皮質の一部である「鳥」という領域の活動も活発になった。Lewith は「この活動が何を意味しているのかは明らかでないが、鍼治療による何らかの現実的作用があることを示している。今回の研究で実証されたのは、鍼治療の効果は一部が期待感によるものだが、実際の治療効果もある可能性が非常に高いということだ」という。この研究成果を報告した論文は、*NeuroImage*¹ に掲載された。

Lewith は自分自身の過去の研究において、鍼治療の効用の一部は期待感によることがすでに示されていたと付言している。その研究では、頸部に慢性的な痛みのある被験者が対象になっており、痛みの緩和効果の約 80% が偽薬効果であることが明らかにされていた²。

「Lewith たちの研究は、今後、より適切な鍼治療の臨床試験を計画するうえで役立つだろう。この研究は、鍼治療の考えられる作用メカニズムを明らかにしている」と Kaptchuk は語っている。

参考文献

1. Pariante J., White P., Frackowiak, Richard S. J. & Lewith G. *Neuroimage*, **25**, 1161 - 1167 (2005).
2. White P., Lewith G., Prescott P. & Conway J. *Ann. Intern. Med.*, **141**, 911 - 919 (2004).